

## いしかわ地域づくり円陣2012全体会

ひな壇トーク！ 光をあてる 磨きをかける 未来につなぐ ～世界農業遺産「能登」学ぶ～

### 【ひな壇の皆さん】

- ・ ヴァファダーリ・メッヘリージ・カゼム：立命館アジア太平洋大学助教
- ・ 埴 正浩：株式会社日本海コンサルタント専務取締役
- ・ 山崎 昭宏：株式会社ぶなの森 インタープリター
- ・ 北野 啓子：石川県社会福祉協議会 地域福祉課専門員
- ・ 谷内 博史：石川地域づくり協会コーディネーター
- ・ 由田 徹：石川地域づくり協会コーディネーター
- ・ 赤須 治郎：石川地域づくり協会コーディネーター
- ・ 村本 睦戸：石川地域づくり協会コーディネーター

### 【進行役】

- ・ 濱 博一：石川地域づくり協会コーディネーター

### 【アシスタント】

- ・ 鶴 敬太郎：石川地域づくり塾生



### 進行役 濱 一博：

出演者が順番に話していく、普通のシンポジウムにしたいと思いません。面白いほうがいいですね。この「ひな壇トーク」は出演者の皆さんから面白い話を引き出すため、事前の調整はしていません。最初は分科会報告です。協会コーディネーターが報告します。第1分科会から順番に…ではありません。第4分科会、石川地域づくり協会コーディネーターの村本さんから報告をお願いします。

### ●<分科会報告> 第4分科会「元気が見えるバーチャンネットワークをつくろう」

### 協会コーディネーター 村本睦戸：

第4分科会は社会福祉協議会が中心となったものですが、「地域づくり円陣」としてはなかなか面白い取り組みだったと考えています。福祉の面からも地域づくりはありますが、今までなかなか福祉と地域づくりのコラボがありませんでした。どんなこ

とをやってきたかということについては、いろいろ素晴らしい答をいただきました。

気づきがありました。社会福祉協議会や包括センターとはどういうものなのかから勉強させてもらいました。分科会での気づきは、個人情報というものが福祉と地域づくりの障害になっていることです。善意でやっているのに煙たがられる、行政とやっていると個人情報のバリアがある、役割分担、誰に伝えてどう連携していくのか、誰に担っていくのかなどの問題点が浮かびあがってきました。ひまわりネットワークなど能登町の施策がありますが、ネットワークを活用し、キーマンを育てていくことが課題となっています。やる気があるのですから、小さなサロンを作って参加者を少しずつ増やしていく、その中からキーマンを作っていったらどうかと思っています。自助、共助ができていく地域です。ボランティア連絡協議会には66団体9個人、1600人ほどが登録している組織です。素晴らしい組織です。

#### コーディネーター 北野啓子：

濱さんからご紹介いただいた、中学生の娘がいる北野です！元気な高齢者がたくさんいるということで、そういった人材を活用していこう、また、ボランティア連絡会や町会連合会も施策への提言や働きかけも行っていこうということです。課題としては、福祉というところにまだ入り込んでいないことです。分科会もグループワークも百点満点に近い内容でした。



#### 分科会参加者（会場から）：

分科会では、ボランティアで結婚相談所がないかという質問がありました。今はないと答えました。行政がやっているものもありました。「おせっかいおばちゃん」が段々いなくなりました。皆さん、上品になられたから？結婚相談所に期待していないのかなと思います。

#### ●<分科会方報告> 第2分科会「まちは大きな博物館」

#### 協会コーディネーター 由田 徹：

午前中は松浪駅や民有歴史文化財を見学しました。ラブロ恋路で、大橋のり子さんがスタッフとして制作した15分程度のDVDを紹介。この地域を魅力的に伝える内容になっていました。活動の経緯と内容を事務局の中さんから紹介してもらいました。

中さんとは地域づくり塾で学んだ仲です。私はどちらかというと実践派です。中さ

んは説明が上手で、論理的に整理されています。プチミュージアムプロジェクトということで、まちの中に眠っている地域の宝を掘り起こして、民間の場所で小さなミュージアムと作って紹介していこうというものです。能登町で大きなものを作るのではなく、管理経費もかからない民間の場所を使ったミュージアムをつくっていこうという動きです。ネーミングもパッケージ化していこうということで、「トリビア」というネーミングで、皆さんがトリビアを語る、視点を分散しないということを論理的にお話しされていました。

昼食後、大橋のり子さんの恋路物語の朗読がありました。大聖寺で積極的に地域づくりをされている瀬戸さんは中さんと逆の視点をもっておられ、論理的な中さんとの激突が面白い展開になりました。瀬戸さんは、とにかくやる、お金と理論はあとから付いてくる、というタイプです。

#### 進行役 濱 一博：

論理派と行動派が激突するのは、どこの現場でもあることです。大抵は行動派が勝つ、武闘派だから。論理派は平和主義者です。行動派が勝つと論理が抜けてしまうので、どこ行くかわからない状態になります。理論派が勝つと理屈ばかりで、いつまで経っても行動しないですね。



#### コーディネーター 埴 正浩：

私は能登町の出身で、母親が松浪に住んでいます。地域に少しでもご恩返しをしたいと思い、ここに来ました。

激突しているわけではなく、皆さん納得してやっていました。最後に瀬戸さんと大橋さんに宿題を出してほしいとお願いしました。大橋さんは、楽しくもう一度来なくなるような活動にしてくださいとメッセージ。女性や子どもなどいろいろな方が入っていける活動にしてくださいとお話しされました。瀬戸さんは、このままだと成功しない、もっと失敗例に学んでほしいとメッセージ。大聖寺では十数年かかっている、しかし、まちなみゼミ全国大会を誘致したことで、文化庁からお墨付きがついて、これまでの地域からバッシングが支援に変わったことや、まずは動いて、お金も自ら出すような活動をしてほしいということをお話しされました。

止められるまでしゃべってしまいましたが…。私も能登の出身ですので、どうかすると引っ込み思案で、「サザエのしっぽ」と言われています。もっと自分の考えをはっきり言う。能登町総合計画に込めた言葉は「一步前に進む能登町」。能登町の人にも

っと一歩前に出て、自分たちがまず行動することが大事です。

進行役 濱 一博：

第2分科会に参加された方は今の二人の説明で納得されますか？ここには「ガッテンボタン」がないので…あ、合点ですか。やっていただいております。

「のとトリビア」小さな集まりで、投資も経費も小さくということですね。外部からのお墨付きで変わるといいますが、日本人は身内のことは聞きません。他人が言ってくれないことを言ってくれる妻は有難い存在ですね。逆らえませんから…。

●<分科会報告> 第3分科会「私たちは世界遺産を育てている」



協会コーディネーター 赤須治郎：

濱さん、ハードルをあげていただき、ありがとうございます。第4・2分科会の二人が真面目にやり過ぎて、私も真面目にやらなければならないかと思ひまして…。気のせいですか。

第3分科会では、先ほど表彰された宮本さんが問題を提起し、ゲストの方に専門家の立場でコメントしていただきました。ビジネスの視点を入れようということで地元の造園業者の方にも来ていただきました。それを地元のコーディネーターである山崎さんがまとめました。

前半は問題を出し合い、問題意識を共有しました。のとキリシマツツジの価値を考えました。ビジネスの面からも考えました。その後はフィールドワークでツツジを見せてもらうために宮本宅へ。とても大きい家でした。50人入っても大丈夫な家。食事の後、裏庭の森の中で、円陣を組んでワークショップを行いました。問題点をどうしていくかについて意見交換しました。保護・育成について、自分ならこうするという意見が交わされ、それにより一つの方向にもっていったと思います。

気づきとしては、これまでビジネスについて議論してこなかったことです。マニアがやっている、お金のことはどうでもいい、というふうにやっているだけではないかと私は解釈しました。経費やお金に対してきちんと向き合う。

運営関係者は前日の夜から集まって、話し合っている。当日はさらによい分科会になりました。地域づくりの見本のような分科会になった。コーディネーターの山崎氏の段取りが丁寧でした。



コーディネーター 山崎昭宏：

開催前に電話がかかってきて、「ツツジの造園の話では誰も集まらないよ」と言われました。「ガーデニングが好きな人しか集まらないのでは」と言われていました。私はショックでした。

のとキリシマツツジは能登の象徴で、風土そのものです。能登の良さや課題が集約されていると考えています。先生方にも教えていただき、自信がありました。押し返すことで今回の分科会で何がやりたいのかがはっきりしました。とにかく、何がすごいのかを明らかにして、どうつないでいくのかを考えていただくという内容でした。先生方や関係者の皆さんからお聞きした面白い話を参加者の皆さんに伝えたいと思い、それを皆、題材にしました。私自身が勉強になり、能登は深いな、とあらためて感じました。

皆さんの意見を付箋に貼ってもらいました。今度まとめて読み解いて、皆さんとシェアしていきたいと考えています。

進行役 濱 一博：

それで終わり？肝心な話をしていないですよ。のとキリシマツツジは、例えば、どういうところが能登の象徴でしょうか？

コーディネーター 山崎昭宏：

まず、倉重氏の意見では、のとキリシマツツジは本数・集積とも日本一、ツツジの専門家も知らなかった発見であったということです。そして、大きい。年数も関係しますが、他の地域ではこんなに大きいのとキリシマツツジは残っていないそうです。沢山残っていて、裏にもごそごそあり、隣の人も知らないといった具合です。品種が多く、変種も含まれている、遺伝子的に面白い、興味対象であるということです。能登の家で何代にもわたり、個人の家で家族が守り継いできたことです。生きている宝です。こういったことが風土に根ざしているということです。

進行役 濱 一博：

それはのとキリシマツツジにどこがすごいかということですね。



協会コーディネーター 赤須治郎：

一つだけ追加させてください。うかつにも気がつかなかったのですが、のとキリシ

マツツジは園芸種です。人が育てたものということです。400年前や300年前に手をかけて育てたということです。そこには文化もあり、生活もあり、価値観もあったということです。自然に残っていたものではありません。そこが素晴らしいと思います。守っていこう、伝えていこうという意識がありました。

コーディネーター 山崎昭宏：

今度はそれを受け継ぐかということです。「もういらないよ」「売ってしまおうか」という選択肢が出てきたり、少子高齢化・過疎化で地域から人がいなくなるということですから、のとキリシマツツジは存続の危機を迎えています。史上初めて直面しています。まさに地域課題そのものです。のとキリシマツツジ1本で全ての問題が表面化してきています。

進行役 濱 一博：

ビジネスの視点を入れないと受け継がれていかない、後継者も育てないと受け継がれていかないというのが能登の課題ですね。

第2分科会と共通しているように思えます。「のとトリビア」のように地域の宝を発掘して、価値を高めていき、伝えていくといった点などです。皆さん、「ガッテン」してもいいですか？

協会コーディネーター 赤須治郎：

いいえ、一つだけ違います。1本1000万円という市場価値が出てきています。じゃあ

売ってしまうのか、魂を売るのか、という話が出てきています。現在の能登の皆さんの葛藤です。どういう残し方をしていけばいいのかということです。それについては今日の分科会では話が出来ませんでした。そういうことに直面しています。

進行役 濱 一博：

うちのばあちゃんがよく見ているTV番組「お宝鑑定団」でも、「この人、このお宝を絶対維持することができないな」「博物館に売ったほうがいい」と思うことがよくあります。のとキリシマツツジもそうになっていく可能性があるのではないのでしょうか？

民有「歴史文化」資産の保存活動を考える会 中 與七郎：

「奥能登トリビア蔵」のコンテンツの一つがのとキリシマツツジです。オープンガーデンでは、5月になる500軒になります。

進行役 濱 一博：

オープンガーデンは有料でやっていますか？

民有「歴史文化」資産の保存活動を考える会 中 與七郎：

無料です。

進行役 濱 一博：

なるほど。わかりました。第3分科会が長すぎるので、これくらいにします